

織田信長の四国攻め

もし、本能寺の乱がなかったら

長宗我部氏と三好氏の阿波を巡る抗争と織田政権そして明智光秀

天正10年6月2日明朝 本能寺の乱勃発。

- 天正10年6月2日 朝、京都本能寺に滞在していた織田信長を家臣・明智光秀が謀反を起こして襲撃。
- 信長は寝込みを襲われ、包囲されたのを悟ると、寺に火を放ち自害して果てる。
- 信長の嫡男で織田家当主信忠は、宿泊していた妙覚寺から二条御新造に退いて戦ったが、やはり館に火を放って自刃。
- 2人の非業の死によって織田政権は崩壊することとなる。

長宗我部元親討つべし！ 織田信長方針転換

- 天正3年(1575)頃、織田信長は長宗我部元親に、**四国内は元親の切り取り次第**という朱印を出す。
- しかし、天正9年の後半頃に、**土佐と阿波半国しか領有を認めない**と通達した。
- 元親は承知せず「**四国はそれがしが切り取った領土**。信長卿に与えられたものではない」と反発。
- 信長は、四国を席捲するばかりの長宗我部勢力の増長に危惧を抱くと共に、長宗我部氏と敵対する三好氏を支援する羽柴秀吉の献策などあつて、天下統一の早期実現のためには**長宗我部氏を討つべし**という方針を固める。

織田信長、信孝に四国攻めの指示を下す

- 天正10年（1582年）5月上旬、信長は三男の織田信孝を総大将、丹羽長秀・蜂屋頼隆・津田信澄を副将として四国方面軍を編成し、四国攻めの指示を下す。
- 信孝を三好康長の養子とする。
- 讃岐国を信孝に、阿波国を三好康長に与える。
- 伊予国・土佐国については信長が淡路に到着してから決める。
- 信孝らの軍は6月2日（3日とも）に四国へ向けて出航する予定であった。

長宗我部氏 九死に一生を得る。

- 6月2日早朝、信長は明智光秀の謀反により本能寺にて自害。
- 後ろ盾である信長を失った三好康長は勝瑞城を捨てて逃亡。
- **長宗我部氏は存亡の危機を脱し**、一転して阿波・讃岐侵攻の絶好の機会を迎えた。
- 天正10年8月 長宗我部は、一宮城、夷山城を奪回し、中富川の戦いで勝利を収める。
- 十河存保は阿波と勝瑞城を放棄し、同年9月、讃岐の虎丸城に撤退。
- 阿波国内で長宗我部氏に反抗する者は土佐泊城の森村春のみとなった。
- 天正11年旧織田家家臣の柴田勝家、そして天正12年徳川家康らとも結んで羽柴秀吉に対抗しつつ、阿讃そして天正13年には伊予の覇権をほぼ掌握する。

もしも、本能寺の乱がなかったら

- 本能寺の変がなければ、日本の歴史はまったく違うものとなっていたはずである。この事件がなければ、日本はどう変わっていたのか。
- また、阿波の国はどうなっていたのだろうか。
- 信孝軍が長宗我部氏を滅ぼし、三好康長の養子となった信孝が、讃岐・阿波の領主となっていた可能性は強い。
- 蜂須賀家政が阿波に入ることもなく、その後の阿波藍や、阿波踊りの隆盛もなかったかもしれない。

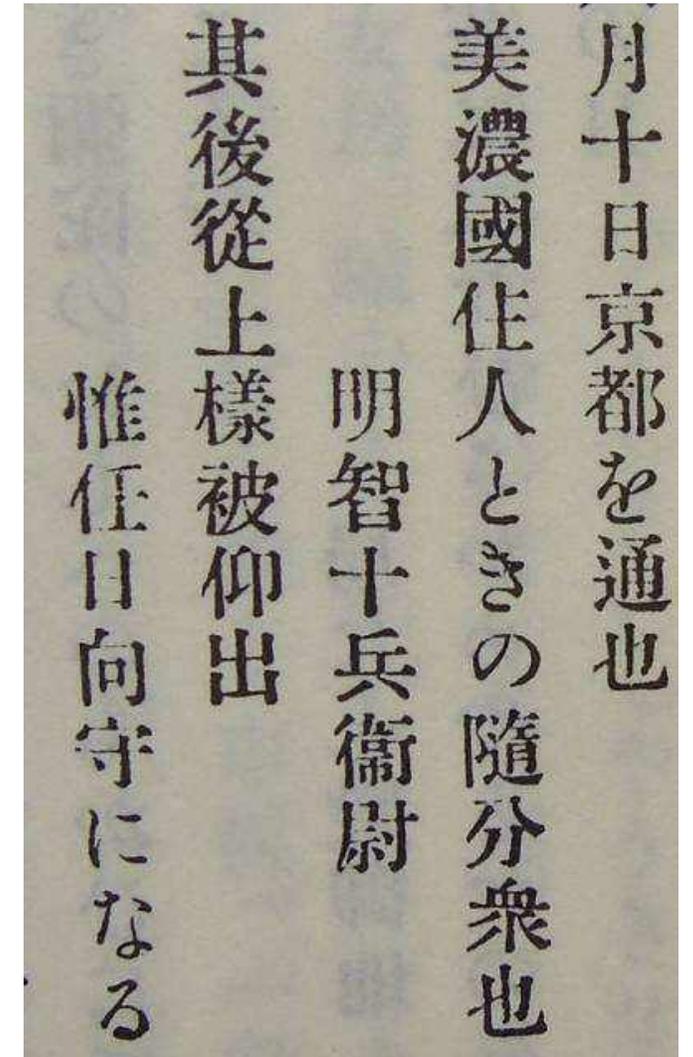
何故、本能寺の変は起こったのか

- 明智光秀が織田信長誅滅を断行した動機は、いまだに日本史上最大の謎の1つである。
- 謎の解明が困難なのは、光秀関係の史料の多くが抹殺・改竄されてしまったためだ。
- それほど「主〈しゅう〉殺しの逆臣」という汚名は重いものであった。
- いったいなぜ、光秀は織田信長を殺したのだろうか。

天下の謀反人 明智光秀

- ただの謀反人ではない、光秀像とは
- 立入左京亮入道隆佐記
美濃国住人 ときの随分衆也
- 光源院殿 御代 当参衆 并 足輕 以下 覚書
足輕衆として明智の名がある
永禄11年一乗谷で足利義昭の家臣となったと思われる。
- 多聞院日記
「光秀は細川兵部太夫の中間だったのを信長に引き立てられた」

- 「結局光秀はその父の名さえはっきりしないのである。」
- 「光秀の家は土岐家の庶流ではあったろうが、光秀の生まれた当時は文献に出てくるほどの家ではなかった」
- 「光秀は秀吉ほど微賤(びせん)ではなかったとしてもとにかく低い身分から身を起した」(高柳光壽『明智光秀』)



光秀の出生地

- ①**明智城址**北麓に有る、明智氏菩提寺である天龍寺（**岐阜県可児(カニ)**市）には、明智氏歴代の墓所があり、本堂には日本一大きい光秀公の位牌（184 c m）が収められている。
- ②**千畳敷砦**（**岐阜県恵那市**）の光秀産湯の井戸。明智町の街並みを北に見下ろす山上にある。

宝治元年（1247）、遠山景重が明知城（可児市の明智城とは別）を築城した時に、戦略上重要な地点として当地に砦を築いたといわれている。



- ③土岐氏の発祥地、**一日市場館**（**岐阜県瑞浪**(みずなみ)市）に新たに建てられた光秀像。光秀は近郷の高屋敷で生まれ、この地の井戸で湯浴みしたのだと伝えられている。
- ④**中洞白山神社**（**岐阜県山県市**）にある光秀産湯の井戸。ここから山中に入ると光秀の墓がある。



麒麟が来る



仁政を行う王の元に現れるとされる伝説の動物「麒麟」
武将として勇猛で、知性に満ちた天才で、家族愛を持っている、
そんな新しい光秀像が描かれるそうだ。

歴史以前の明智光秀についての通説

- 美濃の国人。美濃守護土岐氏の一族。
- 美濃を支配していた斎藤氏の内乱の際、叔父明智光安が敗北。
- 居城である明智城を追われ、流浪の身となる。弘治2年(1556年)28歳
- 諸国遍歴の上、越前の朝倉家に仕官する。
- そして、朝倉家を頼って落ちてきた足利義秋（のちの足利義昭）と、それを支える細川藤孝に協力し、尾張国、美濃国を支配する織田信長を頼るよう提案。織田家との橋渡しをする。
- その後、信長の助力を得て、はれて征夷大將軍となった義昭と、織田信長に両属する形となり、永禄十二年（1569年）四月 十四日付賀茂庄中宛ての書状で、歴史の中にその名を刻み始めることとなる。

『惟任退治記』 と 「明智軍記」 が明智光秀像をゆがめた

- 明智光秀謀反の動機が怨恨や天下取りの野望だとしたのは羽柴秀吉である。
- 本能寺の変のわずか四か月後に家臣に命じて書かせた本能寺の変の顛末記『惟任退治記』にそう書き込ませた。
- また、「明智軍記」という軍記物がある。歴史家の中では作り話だと理解されている書物だ。成立は元禄年間（1688年～1704年）とみられている。
- 少なくとも、天正10年（1582年）に明智光秀が山崎の戦いに敗れ死去してから、約120年後に成立した書物である。作者は不明。
- 物語としては面白い。が、書いてあることに間違いが多い。

司馬遼太郎氏の描いた「明智光秀」と、実在の明智光秀

- 「光秀は明智城の城主の子供であり、明智城が落城した際に逃れて諸国を放浪した」という話は、「明智軍記」に初めて書かれた話である。
- 「明智軍記」は、本能寺の変から120年もたって書かれた書物であり、光秀が明智城に居たという話の信憑性は全く無いと言われている。
- なお、光秀が歴史の表舞台に登場してくるのは、信長が将軍・足利義昭を奉じて上洛した永禄12年の時である。
- 同年4月16日付で、朝廷の御蔵職である立入宗継宛の「地元の豪族に横領されていた朝廷御料地を、朝廷の直接管理に戻す」と発令したことを伝える「光秀他三名連署状」が残っている。
- それ以前については闇に包まれている。

明智光秀の出生と生年

- 清和源氏の土岐氏支流である明智氏に生まれたとされる。父は江戸時代の諸系図などでは明智光綱、明智光国、明智光隆、明智頼明など諸説がある。また、父親の名前も伝わらない低い身分の土岐支流とも言われている。
- 生年は信頼性の高い同時代史料からは判明せず、不詳である。ただし、後世の史料によるものとして、『明智軍記』などによる享禄元年（1528年）説、および『当代記』による永正13年（1516年）説の2説がある。
- また、橋場日月は『兼見卿記』にある光秀の妹・妻木についての記述から、光秀の生年は大幅に遅い天文9年（1540年）以降と推定している。
- 光秀は子の年の生まれとの伝承（鼠が馬の腹を食い破る）がある。

- 「美濃国諸旧記」では、美濃国可児郡明智莊明智城（岐阜県可児市）の出身で、父は明智遠江守光綱とされている。
- このように光秀の前半生については諸説様々で、確かなことはまったく判明していない。
- おそらく光秀は可児郡明智莊を伝領した土岐明智氏惣領家の人であったかもしれない。
- 「美濃国住人とき（土岐）の随分衆也。明智十兵衛尉、その後、上様（信長）より仰せ出され、惟当日向守になる。名誉の大將也」
「立入左京亮入道隆佐記」

更に、こんな説も

- 「続群書類従」本「**明智系図**」では
明智光秀は享禄元年（1528）3月10日、⑥**美濃国多羅城**にて、**明智玄蕃光隆**と若狭の**武田義統の妹**との間に生まれたとされている。
- 「**明智一族宮城家相伝系図書**」では
享禄元年（1528）8月17日、岐阜県大垣市**上石津町多羅**で生まれる。
- 光秀の**父**は**山岸(進士)信周**、**母**は明智家当主「**明智光綱**」の**妹**で、明智家当主光綱に子供が無かったので、**養子として明智城に入った**。弘治2年（1556）9月**明智城落城後**、しばらく浪人し、のち**足利義昭公に仕え**、その後**織田信長**に仕えた。（⑥多羅城は進士家の居城）

進士家とは

- 進士家は御旗指役であり将軍家の軍旗を守る名譽の家であった
- 進士家は美濃井口（岐阜市）の他近江・山城・三河など各所に所領
- 「永禄8年5月」政変後も進士氏は健在。光秀登場とともに消える。

「明智光秀公家譜古文書」

- 進士信周、妻は明智玄蕃光隆の姉なり。信周（のぶちか）子多々あり。
- 嫡子進士美作守晴舎と云（ふ）。未だ部屋住にて将軍家に直勤す。
（永禄の変で、敵の侵入を許したことを詫びて御前で切腹）
- 次男山岸勘解由信舎と云（ふ）。
- 三男進士九郎（三郎）賢光（1551年に三好長慶の暗殺に失敗して斬殺）と云えり。
- 四男乃（ち）明智光秀也（後で明智に改名した）

進士賢光、三好長慶を襲い失敗して自害

- 天文20年（1551年）、将軍足利義輝は政所執事伊勢貞孝邸で三好長慶が酒宴を行うとの情報を得て、その場で長慶を暗殺しようと奉公衆の進士賢光を伊勢邸に派遣した。賢光は酒宴中に長慶に抜刀して向かっていったが軽傷を負わせたのみで暗殺には失敗してしまい、その場で自害して果てた。

進士晴舎、永禄の変で、敵の侵入を許し御前で切腹

- 永禄8年（1565年）三好・松永勢は清水寺参詣を名目に約1万の軍勢を集めて御所に押し寄せ、将軍に訴訟ありと偽って取次ぎを求めた。
- 進士晴舎が訴状の取次ぎに往復する間、三好・松永の鉄砲衆は四方の門から侵入して攻撃を開始した。
- 将軍方は激しく応戦し、その間に殿中では、進士晴舎が敵の侵入を許したことを詫びて御前で切腹した。

光秀は、進士晴舎の弟(息子?)の進士藤延か

- 進士氏は、永禄の変で没落または滅亡したと思われる一族である。
- 『日本史』に「公方様の政庁の最高の貴人たち」の一人として「美作殿」という人物が登場するが、これは進士美作守晴舎を指している。
- 彼の娘小侍従は将軍義輝の閨房に入っており、将軍との間に子供（女子）をもうけていた。つまり、進士晴舎は将軍の外戚ということになる。
- 小侍従は、殊に将軍の寵愛が深かった。
- しかし、進士晴舎は永禄の変の当日、御所で自害、義輝の側室だった娘も殺された。その後、進士一族がどういう顛末を辿ったのか・・・
- 少なくとも歴史の表舞台からは姿を消しているが?
- 弟(息子?)の進士藤延は生き延びて、後に信長の命により明智光秀と改名した?との説もある。(小林正信)

明智改名説(小林正信)

- **明智光秀**とは、室町幕府の奉公衆の**進士源十郎藤延**である。その父は、進士美作守晴舎である。
- 永禄の変で藤延は妹の小侍従と共に生き延びる。
- 藤延の母は土岐氏の一族で明智出身だった。
- **明智氏は内紛で妻木氏と菅沼氏に分かれ、「明智姓」は空白となっていた。**
- 新しい美濃の支配者**信長**は、美濃を支配するために、使われていない「明智」の性を利用し、**進士藤延を明智光秀に改名**させた。
- 光秀は、室町幕府の「奉公衆」の出身者であったからこそ、「奉公衆、奉行衆」などを統括する存在として、織田政権においても重きをなしていた。

東海百城 (29)

美濃人の本能寺の謎①

本能寺の謎は、明智光秀の父である進士源十郎藤延の出自にあり、その母は土岐氏の一族で明智出身だった。永禄の変で藤延は妹の小侍従と共に生き延びる。藤延の母は土岐氏の一族で明智出身だった。明智氏は内紛で妻木氏と菅沼氏に分かれ、「明智姓」は空白となっていた。新しい美濃の支配者信長は、美濃を支配するために、使われていない「明智」の性を利用し、進士藤延を明智光秀に改名させた。光秀は、室町幕府の「奉公衆」の出身者であったからこそ、「奉公衆、奉行衆」などを統括する存在として、織田政権においても重きをなしていた。

明智へ改姓 信長の戦略

信長は美濃を支配するために、使われていない「明智」の性を利用し、進士藤延を明智光秀に改名させた。光秀は、室町幕府の「奉公衆」の出身者であったからこそ、「奉公衆、奉行衆」などを統括する存在として、織田政権においても重きをなしていた。

尾張所も切った種

尾張所も切った種。信長は美濃を支配するために、使われていない「明智」の性を利用し、進士藤延を明智光秀に改名させた。光秀は、室町幕府の「奉公衆」の出身者であったからこそ、「奉公衆、奉行衆」などを統括する存在として、織田政権においても重きをなしていた。

妻木城

妻木城。信長は美濃を支配するために、使われていない「明智」の性を利用し、進士藤延を明智光秀に改名させた。光秀は、室町幕府の「奉公衆」の出身者であったからこそ、「奉公衆、奉行衆」などを統括する存在として、織田政権においても重きをなしていた。

明智守

明智守。信長は美濃を支配するために、使われていない「明智」の性を利用し、進士藤延を明智光秀に改名させた。光秀は、室町幕府の「奉公衆」の出身者であったからこそ、「奉公衆、奉行衆」などを統括する存在として、織田政権においても重きをなしていた。

明智の戦術

明智の戦術。信長は美濃を支配するために、使われていない「明智」の性を利用し、進士藤延を明智光秀に改名させた。光秀は、室町幕府の「奉公衆」の出身者であったからこそ、「奉公衆、奉行衆」などを統括する存在として、織田政権においても重きをなしていた。

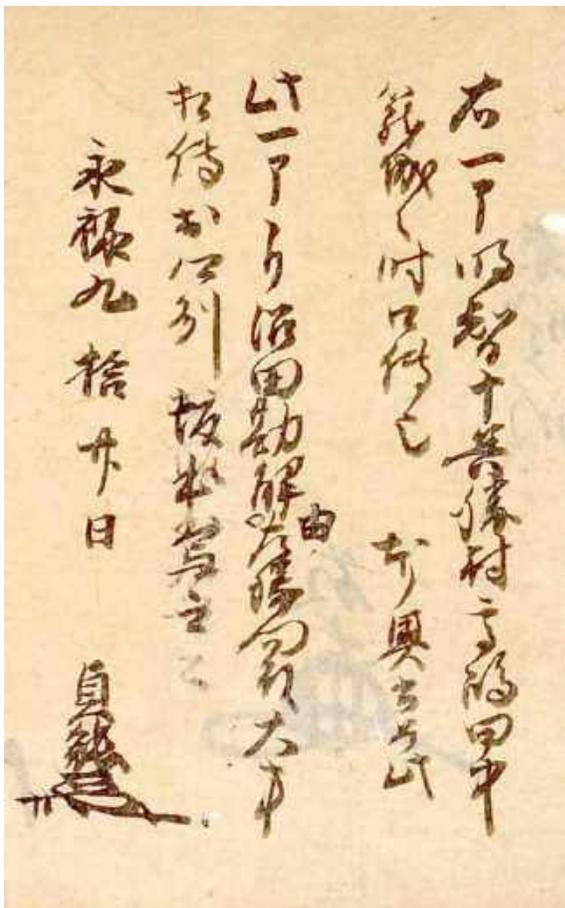
- **青年期の履歴**にも不明な点が多い。光秀は美濃国の守護・土岐氏の一族で、土岐氏にかわって美濃の国主となった**斎藤道三に仕える**も、弘治2年、道三・義龍父子の争い（長良川の戦い）で道三方であったために**義龍に明智城を攻められ一族が離散**したとされる。
- 小和田哲男は、将軍・義輝の近臣の名を記録した『**永禄六年諸役人附**』に見える足軽衆「明智」を光秀と解し、朝倉義景に仕えるまでの間、**足軽大将として義輝に仕えていたとする**。
- 1565年5月 **三好三人衆** は、主君・三好義継と共に、足利義輝 のいる「二条城」を包囲し、**足利義輝を殺害する**。（**永禄の変**）
- その後、**牢人になった光秀**は、越前国の国主「**朝倉義景**」を頼り、その優れた**頭脳と鉄砲の腕前**を買われ、軍師として仕えたとされる。

「米田文書」 『針薬方しんやくほう』 奥書

明智光秀が1566（永禄9）年より前に、交通・経済の要衝だった近江国の湖西で活動していたことを示す書冊が熊本市の旧家で見つかった。
織田信長に仕える前のもので、光秀に関する史料としては最古。

米田貞能〔さだよし〕（求政）が1566年10月、湖西の近江坂本（滋賀県大津市）で書写した。

その奥書〔おくがき〕に針薬方の説明として、元々は「明智十兵衛が近江国高嶋郡の田中城（滋賀県高島市）にろう城した時の医薬の秘伝をまとめたもの」と記されていた。



「米田文書」に含まれる『針薬方』は、光秀の史料上の初見である。

- 右一部、明智十兵衛尉、高嶋田中籠城の時口伝なり、
 - 本の奥書かくのごとし、
 - この一部より、沼田勘解由左衛門尉殿大事に相伝し、江州坂本においてこれを写す、
 - 永禄九 拾 廿日 貞能（花押）
 - ニギリ下しとめたき時
 - 一、ハツ 一、硫黄
 - 一、カンキャウ 一、甘草
 - 水にて手を冷やし、甘草を煎じて手を洗うなり、
-
- 「高嶋田中籠城之時」は、永禄8年（1565年）5月9日に室町幕府第13代将軍・足利義輝が暗殺された（永禄の政変）前後であると考えられる。
 - 将軍家は田中城落城を座視できず、奉公衆を派遣して籠城させ、その中に足軽衆という身分で光秀もいたという事である。
 - 信長の上洛前から光秀は湖西地域に拠点を持ち、足利将軍に近い武士と関係をつくっていたと考えられる。

光秀は、室町幕府の奉公衆であったのか

- 光秀が、**室町幕府の足輕衆**として仕えていたという記録は、「光源院殿御代当参衆并足輕以下衆覚」通称『**永禄六年諸役人附**』という室町幕府の**役職名簿**に残っている。
- しかし、前半にある「足利義輝」時代のものには登場せず、後半の「足利義昭」時代のものに「足輕衆」として「明智」という姓だけが登場する。
- 一説には、光秀は「奉公衆」の最高幹部級である「**部屋衆格**」であったとも言われている。
- また、「**奉公衆**」の**進士藤延が永禄の変を生き延びて明智へと改姓**し、実弟の進士貞連は光秀の家臣となり代わりに家督を相続したとの説もある。

「光源院殿御代当参衆并足輕以下衆覚」

永祿六年

諸役
人附

光源院殿御代當參衆並
足輕以下衆覺。

永祿六年五月日

御供衆。

大館陸奥守晴光。

同十郎輝光。

細川中務大輔輝經。

大館伊豫守晴忠。

仁木七郎。

一色式部少輔藤長。

細川兵部大輔藤孝。

上野孫三郎。

一色兵部大輔輝清。

畠山尉松。

伊勢因幡入道心榮。

同七郎左衛門尉貞知。

足輕衆。

山口勘助。

三上。

一卜軒。

移飯。

澤村。

野村越中守。

内山彌五太兵衛尉。

丹彦十郎。

長井兵部少輔。

藥師寺。

柳澤。

珍藏主。

森坊。

明智。

奉公衆とは

- 奉公衆は武官官僚とも呼ぶべき存在であった。
- 成員は有力御家人や足利氏の一門、有力守護大名や地方の国人などから選ばれる。
- 奉公衆とは別に創設されていた足輕衆の整備も図られた（明智光秀も元は足輕衆の出身であったと考えられている）。
- 永禄の乱の際には「奉公衆数多討死云々」と「言継卿記」に記されている。
- 天正元年足利義昭は織田信長によって京都から追放されるが、義昭と行動を共にし鞆幕府に参加した奉公衆は全体の2割ほどであったと伝えられる。
- 伊勢貞興や幕府奉公衆の大多数は、その後義昭と共にせず、石谷(齊藤利三)氏、進士氏の様に、光秀の配下として延命する道を選んだ。

光秀、歴史史料上に初登場

- 明智光秀という人物の名が明確に登場するのは、永禄11年11月14日付『山城上賀茂惣中宛 村井貞勝・明智光秀連署状』となる。
- 織田家吏寮で信長から京都所司代を命じられている村井貞勝と幕府の行政の代表として明智光秀が連署しており、これは織田信長の上洛後、室町幕府の行政組織がやっていた仕事の織田政府への引継ぎだと考えられる。
- つまり、明智光秀が、幕府の行政面を取り仕切る”奉行職”をやっていた室町幕府の有力役人であったことが分かる。
- 信長の上洛前から、光秀は幕府の奉行衆であったのではないか。

山城上賀茂惣中宛村井貞勝・明智光秀連署状写

当所寺社領之事、如有来、無異義被仰付候、被得其意、可有全領知事尤候、然者、各被相談、急与罷出、御礼可被申上候、為其如此候、恐々謹言、

霜月十四日

明智光秀 在判

村井貞勝 同

上賀茂惣御中

概訳

当寺社領の事、従来通り問題なく安堵されるので、朱印状が出る前に、急ぎ信長公のところへ出頭して、御礼を申し上げよ。

永禄11年(1568年)11月14日

明智光秀・村井貞勝

上賀茂惣中殿

三好三人衆 六条本圀寺攻め

- 次に、明智十兵衛光秀が信憑性の高い史料に出てきたのは「**信長公記**」の**永禄十二年**の記事からである。
- 「**三好勢返す 六条合戦の事**」永禄12年(1569年)正月4日
- 三好三人衆は畿内を流浪していた斎藤右兵衛太輔龍興・長井道利主従ら南方の諸浪人を糾合し、薬師寺九郎左衛門を先懸けに、公方様御座所六条本圀寺に攻め寄せた。
- 上洛した**足利義昭**を**三好一族が襲撃**した事件である。
- このとき**義昭**を守って**本圀寺**に立て籠もり戦い、**戦果**を上げた人物名の中に**明智十兵衛光秀**の名がある。

光秀の誕生から死亡まで略歴

- 1528年 光秀誕生 参考:蜂須賀正勝は1526年生まれ
- 1545年 妻木熙子と結婚 18歳
- 1556年 斎藤道三が義龍に攻められた時明智城脱出 29歳
- 1565年 永禄8年 足利義輝 暗殺される 38歳 永禄9年 木下藤吉郎墨俣一夜城を築く
- 1568年 永禄11年9月 義昭の上洛に加わる 41歳
- 1568年 永禄11年11月 明智光秀連署状 奉行職
- 1569年 永禄12年 三好三人衆 六条本圀寺攻め 42歳
- 1570年 元亀元年 金ヶ崎の戦いで殿を務める 43歳
- 1571年 元亀二年 比叡山焼き討ち 44歳
- 1573年 元亀4年 足利義昭追放 46歳
- 1575年 天正3年 惟任日向守を賜る 48歳
- 1580年 天正8年 丹波一国（約29万石）を加増され計34万石を領する。 53歳
- 1581年 天正9年 京での御馬揃え 54歳
- 1582年 天正10年 本能寺の変 死亡 55歳

光秀辞世の句

- 順逆無二門 大道徹心源 **五十五年夢** 覚来帰一元

順逆二門に無し 大道心源に徹す
五十五年の夢 覚め来れば 一元に帰す

- 吉川英治氏の訳
- たとえ信長は討つとも、順逆に問われるいわれはない。彼も我もひとしき武門。武門の上に仰ぎかしくむはただ一方のほかあろうや。
- その大道は我が心源にあること。知るものはやがて知ろう。
- とはいえ五十五年の夢、醒むれば我も世俗の毀誉褒貶に洩れるものではなかった。しかしその毀誉褒貶をなす者もまた一元に帰せざるを得まい。

「明智光秀は細川藤孝と共に義輝の奉公衆であった」

- **通説**では、故郷美濃を追われ諸国遍歴していた**明智光秀は越前朝倉氏に仕え、**将軍を奉じて朝倉を頼った**細川藤孝と会い、**意気投合し、美濃の織田信長を頼り…となっている。
- しかし、明智光秀は、**元々からして細川藤孝と共に足利義輝の奉公衆**であり、**永禄の変を生き延び、**亡き将軍の弟一条院覚慶（のちの足利義昭）を援け、**細川藤孝と終始一緒に行動**していたとの説がある。
- だとすれば足利義昭が、信長との仲介の使者と抜擢したとしてもおかしくない。
- 光秀は、**将軍と信長の仲介者**として、それなりの**家格と身分**を持ったものであったと思える。

光秀の前半生は卑賤視された 悪行は身分に転嫁する

- 「惟任日向守は十二日勝竜寺より 逃のがれテ、山階にて一揆にたたき殺され、首も骸も京へ引かれ云々、浅まし、細川兵部太夫が中間にてありしをこれ引立て、中國の名誉に信長厚恩にてこれを召し遣わされ、大恩を忘れ至る曲事、天命かくのごとし」

『多門院日記』天正 10 年 6 月 17 日

- 宣教師ルイス・フロイスは、「明智光秀はもとより高貴の出ではなく、信長の治世の初期には、公方様の邸の一貴人、兵部大夫（細川藤孝）と称する人に奉仕していたのであるが」と書いている。
- 医師江村専斎の「老人雑話」では「明智光秀は細川藤孝の家来だった」、「校合雑記」では「明智光秀はもと細川藤孝の徒のもの」とある。
- また、「耶蘇会日本年報」でも、「光秀はいやしい歩卒であった」との記述がある。

- 「**靱井家日記**」には「**明智十兵衛**という**族姓も知らぬもの**を惟任日向守と名乗らせ」と書いてある。
- 明智光秀が天正9年6月1日に作成した御霊神社所蔵の「**明智光秀家中軍法**」という史料がある。
- その添書に「既に**瓦礫沈淪の輩**を召し出され、**あまつさえ莫大な人数を預け下さる**以上は」という一文がある。
光秀自ら**瓦礫沈淪の輩**と卑下している。
- しかし、この史料は石踊胤央徳島大学名誉教授により「明らかに**疑文書**」とされている。
- 光秀は、山崎の戦いの直後から**光秀=謀反人=悪逆人**として**卑賤視**されていたのではないかと思える。

光秀の正室・熙子は土岐氏

- 光秀の正室・熙子（ひろこ）の妻木氏は間違いなく土岐氏族であり、土岐郡妻木郷（現土岐市域）に因る明智一族である。
- 明智一族である熙子の父は、織田信長の家臣・妻木広忠 または弟の勘解由左衛門範熙とされ、『兼見卿記』でも妻木氏と見える。
- 熙子は伝聞で享禄3年（1530年）生まれと言われている。
- 熙子は15歳（1545年）で20歳後半の光秀に嫁いだとされる。
- 「兼見卿記」には天正4年に死去したと記され、西教寺の記録には同年11月7日に42歳で亡くなったとあり、同寺には墓石も存在する。
- 崇禅寺の南の山上には石垣の残る妻木城があり、城下には御殿跡、屋敷跡など史跡も残る静かな土地である。

- 明智家は、内紛により妻木家と菅沼氏に分かれ、「明智姓」は空白となっていた。
- 光秀が正室・妻木氏の由緒を持って「明智姓」を名乗り、土岐氏族の名跡を継いだということで、桔梗紋を用いたのかもしれない。
- 妻木氏代々の菩提寺である崇禅寺（岐阜県土岐市）の廟所の扉にも、金に輝く桔梗紋が付けられている。
- 光秀公家譜古文書に依ると、光秀の母は明智玄蕃光隆の姉であり、その縁で養子となり明智姓を名乗ったとされる。



光秀の妹(義妹)は、信長の愛妾?だった。

- 光秀の義妹のツマキは、信長の側室だったと言われており、兼見卿記、言経(ときつね)卿記等に、公家と光秀そして信長の調整役として何度も登場している。
- 御ツマキは、天正5(1577)年11月、興福寺と東大寺との間の相論に織田方の交渉窓口として史料に初めて登場する。
- 興福寺・一乗院に入室した尊勢(近衛前久の長男)に対し戒を授ける役目である「戒和上職」を巡って、「惟任(光秀)妹御ツマ木」が、光秀と共に東大寺との間の諍いの調停を織田家に働き掛けた。(戒和上昔今禄)
- 御ツマキは、二条の光秀邸の近くに屋敷を構えており、坂本にも屋敷があった。

一、則御乳人へ惟任妹御ツマ木殿ヲ以テ被仰出趣者、此申事近年ノ有姿ニ被申付ヘシト内符サマ御意也、依之惟任へ御チノ人被仰候て、此趣以藤田伝五、簡順へ申付ラル、也、証文ノ写ハエテ被遣了、同我免除事モ伝五請取テ惟任へ可被仰由也、廿三日ノ事也、被仰出ハ廿二日ノ事也、

- 天正9年（1581年）8月、「去七日・八日ノ比歟、惟任ノ妹ノ御ツマキ死了、信長一段ノキヨシ(気好)也、向州(光秀)無比類力落也」。(多聞院日記)
- 光秀の妹の御ツマキが死んで、光秀が非常に気落ちしたと書いてある。
- 御ツマキの死により信長との調整役が無くなった事が、本能寺の変の遠因だったとの説もある。
- また、御ツマキは光秀の後妻だったとか、足利義輝の愛妾だったとも言われている。

足利将軍

- 足利家は「権威」はあったが、直属の軍隊と領地を持っていなかった。
- 足利義輝は近江の「京極家」に厄介になりながら、「細川家」や「六角家」に協力を依頼しその軍勢を借りて、京都を支配していた「三好家」と戦うが、細川家は三好家に破れて没落する。
- そのため三好家と敵対しつつ、近江から京都へ帰還する機会を伺い続ける事になる。
- しかしその後、三好家は方針を転換して足利家との講和を提案、六角家の取り成しもあって足利義輝は三好家と和睦。
- 再び京都に帰還し、ようやく「将軍職」としての立場を取り戻す事になった。

- 将軍として京都に復歸した 足利義輝。
しかし京都を中心とした近畿の権力は、相変わらず 三好家 が握っており、足利家は、まだ「**権威があるだけの飾り**」に過ぎなかった。
- しかし、**足利義輝** の望みは「**室町将軍家の権力復興**」であった。
- 三好長慶 の死と 三好家 の弱体化は、足利義輝 にとってもチャンスとなった。
- 彼はいよいよ 足利家 の権力を復興させようと行動を開始、**松永久秀** を含む**三好家の家老**を京都から追放し、足利将軍家の独立を狙う。
- しかし、**松永久秀**は三好家の家老「**三好三人衆**」と策謀を巡らし、足利義輝 の親類である「**足利義栄**」を新たな**将軍**に擁立して、邪魔になった 足利義輝 を亡き者にしようと「**二条城**」を襲撃し、**足利義輝** を暗殺した。

光秀、義昭と信長の仲介者となる

- 三好らは、義輝の弟・覚慶(28)を興福寺に幽閉したが、覚慶は身の危険を感じて興福寺を脱出、**還俗して足利義昭**となり越前の**朝倉氏**のもとへ逃れる。
- 義昭が朝倉義景を頼ったことから、**光秀は義昭と接触**を持つこととなった。
- 光秀は「義景は頼りにならないが、信長は頼りがいのある男だ」と信長を勧めた。
- そこで**義昭**は永禄11年6月23日**信長**に対し、**上洛して自分を征夷大將軍につけるよう、光秀を通じて要請**した。『細川家記(綿考輯録)』
- 信長への仲介者として光秀が史料（『細川家記』）に初めて登場する。
- しかし、『**信長公記**』には、**光秀が上洛の仲介をしたとは一言も書かれていない**。

- その後、光秀は**義昭と信長の両属**の家臣となり、**永禄11年**（1568年）9月26日の**義昭の上洛**に加わる。『細川家記』
- 信長への**仕官の初祿**は『細川家記』では**500貫文**で朝倉家と同額としており、これは雑兵ら約百人を率いて馬に乗り10騎位で闘う騎馬（うまのり）の身分であり、通説となってきた。
- 義昭が永禄11年7月25日美濃 立政寺へ入った時、信長は「末席に**銅銭千貫文**を積み、御太刀・御鎧・武具・御馬など様々な品物を進上され、御家来衆も手厚く歓迎した。」【信長公記】
- この時の千貫文 = 1億 ~ 1億5千万円と注釈されている。
とすれば500貫は5千万から7千5百万となる。
- しかし、太田牛一の『太田牛一旧記』では、朝倉家で「**奉公候ても無別条一僕の身上にて**」と、特色の無い部下のいない従者1人だけの家臣だと記述している。（太田牛一は光秀を卑下したかったのか）

- 織田信長と足利義昭を”美濃の立政寺”で対面させた永禄11年7月27日、**光秀は私兵500余名**を率いて**足利義昭を先導**した。『細川家記』
- 元亀2年2月30日、信長は岐阜城より上洛して、**京都二条の明智光秀邸を宿所**として泊り、3月1日に禁裏へ伺候予定と書かれている。『言継卿記（ときつぐきょうき）』
- 光秀は信長に500貫（およそ1000石）で召し抱えられたと言われるが、500名の家来を連れたり、信長を千人以上の配下とともに泊める邸宅を持つとなると、可成りの出世である。
- 義昭上洛前後の光秀については、『**信長公記**』と『**細川家記**』そして『**明智軍記**』の記載に大きな**差異**があり注意を要する。

『明智軍記』には、全く異なる光秀像が描かれている

- 信長から再三、光秀に招きがあった。
- 光秀は信長の徳の輝きを見て承知し、朝倉義景に暇を申し上げ、永禄9年10月9日、越前から美濃岐阜へ参上した。そのころ、光秀は39歳であった。
- すぐに猪子兵助を通じて、信長にお目見えした。
- その時、持参してきた祝儀として、菊酒の樽五荷、鮭の塩引の簀巻き二十を献上した。
- また、信長の奥方(濃姫)は、光秀のいところなので、特に奥方への土産として、越前大滝のもとゆい紙三十帖、文箱・香炉箱など五十を献上した。
- 信長は、光秀の知恵がよく回る振舞を見て、美濃安8郡に4200貫の關所があったので、光秀に与えた。

明智は、義昭と信長との仲介者として出てこない

- 「それならば、まずは**使者**を送って、信長の心底を聞きたい」と義昭は仰せになり、**上野清信・長岡藤孝**を岐阜へ派遣しました。
- 信長は「かたじけなくも君命をこうむったことは、私にとってこれ以上の面目はありません」と申されました。
- 上野・長岡の二人の使者は、越前に帰ってこのことを申し上げたところ、**義昭**は非常に喜んで、永禄11年7月18日、**一乗谷をご出発**しました。
- 朝倉義景から路次の警固として、**前波景貞が五百騎**でお供して、敦賀津にお着きになりました。
- 岐阜の**信長から案内者**として、**不破光治・村井貞勝**が派遣されてきたので、朝倉家の警固は小谷から帰りました。
- **浅井長政**は関ヶ原の宿まで、義昭をお送りしました。

『信長公記』への初登場

- 永禄12年（1569年）1月5日、三好三人衆が義昭宿所の本圀寺を急襲した。防戦する義昭側に光秀もあり、『信長公記』へ初登場する。
- しかし、細川 藤賢・織田 左近・野村 越中・赤座 永兼・赤座 助六・津田 左馬丞・渡辺 勝左衛門・坂井 与右衛門・明智光秀とかなり下位の記載。
- 同年4月頃から木下秀吉、丹羽長秀、中川重政と共に織田信長支配下の京都と周辺の政務に当たり、事実上の京都奉行の職務を行う。
- 元亀元年（1570年）4月28日、光秀は金ヶ崎の戦いで信長が浅井長政の裏切りで危機に陥り撤退する際に池田勝正隊3,000を主力に、秀吉と共に殿を務め防戦に成功する。
- 元亀2年（1571年）には、三好三人衆の四国からの攻め上りと同時に石山本願寺が挙兵すると、光秀は信長と義昭に従軍して摂津国に出陣した。

坂本城築城

- 元亀2年9月12日の比叡山焼き討ちで中心実行部隊として武功を上げ、近江国の滋賀郡（志賀郡:約5万石）を与えられ、間もなく坂本城の築城にとりかかる。
- 坂本城は、安土城に先駆けて天守が築かれ、瓦が用いられた城だった。
- また『兼見卿記』元亀3年12月22日の記述によると、
- 明智見廻の為、坂本に下向、杉原十帖、包丁刀一、持参了、城中天守作事以下悉く披見也、驚目了
- 坂本城には天守があり、作事が行われ元亀3年12月頃には天守がかなり進捗していたようだ。

光秀、足利義昭と袂を別つ

- 元亀4年（1573年）2月、義昭が挙兵。
- 光秀は石山城、今堅田城の戦いに義昭と袂を別って信長の直臣として参戦した。
- 同年7月にまたも義昭が榎島城で挙兵し、光秀も信長軍として従軍した。義昭は降伏後に毛利氏を頼って亡命し、室町幕府は事実上滅亡したとされる。
- しかし、室町幕府の統治機構はそのまま残されており、足利義昭は、信長の死後もなお、天正16年正月まで、鞆に御所を設け毛利輝元を副将軍に任命し将軍であり続けた。（鞆幕府）
- 鞆の浦の義昭のもとに亡命した大名衆としては、北畠具親（伊勢国司家）・仁木義政（伊賀守護）・武田信景（若狭守護家）・内藤如安（丹波守護代家）・六角義治（近江守護家）などの、室町時代以来の国司・守護・守護代に連なる人々とその一族があげられる。

光秀、丹波国・丹後国を平定

- 明智光秀は、**天正3年**に、惟任（これとう）の賜姓と、従五位下日向守に任官を受け、**惟任日向守**となる。
- **天正7年**、丹波攻めは最終段階に入り、八上城、黒井城を落とし、ついに**丹波国を平定**。
- さらに、すぐ**細川藤孝**と協力して**丹後国も平定**した。
- 信長は感状を出し褒め称え、この功績で、**天正8年に丹波一国（約29万石）を加増され計34万石**を領する。
- 黒井城を増築して家老の斎藤利三を入れ、福智山城には明智秀満を入れた。
- また丹波一国拝領と同時に丹後国の**長岡（細川）藤孝**、大和国の**筒井順慶**等の近畿地方の織田大名が**光秀の寄騎**として配属される。

信長方面軍を編成する

- 信長は、勢力拡大に伴って四方の敵と隣接すると、万単位の兵を持つ軍団を有力家臣に与えてこれを指揮させた。方面軍編成の目的は、天下統一に向けた**各方面の制圧**である。

- 美濃・尾張・飛騨方面 織田信忠・斎藤利治・姉小路頼綱
- 対武田方面 滝川一益・織田信忠（天正元年）
- 对本願寺方面 佐久間信盛（天正4年 - 天正8年）
- 北陸方面 柴田勝家（天正4年）
- 近畿方面 明智光秀（天正8年）
- 山陰・山陽方面 羽柴秀吉（天正8年）
- 関東方面 滝川一益軍団（天正10年）
- 四国方面 織田信孝・津田信澄・丹羽長秀（天正10年）
- 東海道の抑え 徳川家康
- 伊勢・伊賀方面 織田信雄・織田信包

信長、光秀にとっての天正8年

- 天正8年は、本願寺が降伏し、信長にとって天下統一事業が新たな段階に入り、統一権力の体裁を整えた年である。
- 光秀にとっては、信長から近江坂本に加えて、新たに丹波国を拝領して国持大名になり「近畿管領」と呼ばれるという栄進を遂げた年である。
- 「丹波国日向守働き、天下の面目をほどこし候」（信長折檻状）
- 信長、光秀共に最良と言える年であった。
- この年を頂点として、翌9年から二人の関係の底流に不協和音が響き始める。

「御馬揃え」 戦国の世の終わりを告げる？

- **天正9年** 正月15日に安土城下で行われる**左義長**（新年の火祭り行事）に、「爆竹を打ち鳴らしながら**騎馬行進**を行い、思い思いの出で立ちで参加する」よう触れを出した。

当日は信長自身も奇抜な装束で祭りつりに臨み、たいそう評判になった。

- 信長は**京**でも**大規模な馬揃え**をするよう指示し、**明智光秀**は**奉行**を務める。
- 天正9年2月28日 京での御馬揃えは正親町天皇も臨席のうえ盛大に行われ、光秀はその手腕を存分に発揮し、家臣団で最も**重要なポスト**へと駆け上がっていった。

『明智家法』 後書き

- 天正9年(1581年)年6月2日光秀が家法として定めた『明智家法』後書きに信長への感謝の文を書いた。
- 「瓦礫のように落ちぶれ果てていた自分を召しだしそのうえ莫大な人数を預けられた。」
- 「一族家臣は子孫に至るまで信長様への御奉公を忘れてはならない」

織田政権の崩壊の予感

- 濃尾から近江にかけて領国支配を拡大した**信長**も、伝統的に寺社・荘園の勢力が強い**畿内の支配は十分でなかった**。
- また、**幕府の奉公衆、奉行人層の潜在力**は、侮り難いものを持っていた。
- 信長が、これらの階層を完全に掌握するためには、なお相当の時間を要した。
- しかし、**光秀**は逆に、**これらの階層と強く結びついていた**。

- この様な在地構造を持つ畿内を、自己の権力基盤に出来なかったところに織田政権が自滅する要因が潜んでいたと言える。

- 「信長の代5年3年は持つであろう。明年あたりは公家になるのではないかと
思われる。そうなった後、**高ころびあおのけになって転ぶだろう**。」

『吉川元春宛 安国寺恵瓊書状』

光秀、運命の転機

- 天正9年（1581年）8月 **光秀の妹ツマキが死亡。**
- ツマキは信長お気に入りの側室で、その死去で**光秀の孤立化**が進み、本能寺の変の遠因となったと言われている。
- 天正10年（1582年）5月、徳川家康饗応役であった光秀は任務を解かれ、羽柴秀吉の毛利征伐の支援を命ぜられて6月2日（6月21日）早朝に出陣する。

本能寺の変前夜

- 1 柴田勝家らは北陸遠征中
- 2 滝川一益は関東へ
- 3 織田信孝と丹羽長秀は四国への渡海準備
- 4 羽柴秀吉は高松城を水攻め
- 5 信長は九州平定まで視野に入れ、毛利攻めの支度を開始
- 6 毛利攻めの準備として、明智光秀・細川忠興、池田恒興・高山右近・中川清秀らに出陣の準備命令
- 7 徳川家康が穴山梅雪と共に安土城を訪問

- 信長は博多の豪商・島井宗室を正客に、本能寺で自慢の38種もの名物茶道具を披露した茶会を終えて、**僅かな手勢**とともに**本能寺に滞在**していた。
- 一方の光秀は、羽柴秀吉の援軍を命じられて、およそ1万3千の兵とともに京都にほど近い亀山城にいた。
- 羽柴秀吉、柴田勝家、丹羽長秀、滝川一益などの**織田重臣**たちは、各々、京都から遠く離れた**前線に張り付**いている。
- **徳川家康**は同年3月の武田討伐を労う饗応で、安土へ招かれた後、わずかな近臣と**堺見物**の最中。
- **織田信忠**は、数百の手勢とともに**京都に滞在**していた。
- 光秀にとって、これは、**信長、信忠**父子そして**家康を一挙に討ち取る絶好のチャンス**といってもいい。

光秀、謀反の決意

- 天正10年6月1日、申の刻（午後3時から5時ごろ）、居城である丹波・亀山城にいた明智光秀は家臣たちに出陣を命じる。
- 午後8時ごろ、はじめて重臣たちに重大な決意を告げる光秀。重臣たちは驚愕するが、しかし光秀の想いを汲み覚悟を固めた。
- 兵たちには、今日よりして天下様になられる。出世は手柄次第だ。勇み悦べ！」と触れが出され（『川角太閤記』）、全軍京都へ向けて進軍を開始する。
- 明けて6月2日未明、「本能寺の変」の幕が切って落とされる。
- いったいなぜ、光秀は織田信長の誅滅を断行したのか。日本の歴史を大きく変えたこの事件は、いまだに**日本史における最大の謎の1つ**であり続けている。

本能寺の変 諸説

- **幕府再興説** 足利幕府に取って代わろうとする信長を止めようとした
- **四国説** 光秀や斎藤利三が進めていた長宗我部氏との外交関係をひっくり返したことに反発
- **野望説** 光秀が天下を狙った
- **遺恨説** 徳川家康の接待を巡り、信長から侮辱的な扱いを受けたり、人質となった母を見殺しにされたりした
- **突発説** たまたま信長が本能寺で手薄な状態であることがわかった
- **黒幕説** 光秀に指示をした黒幕としては、朝廷、足利将軍、イエズス会などがある
- **高年齢説** 老い先短いと感じた光秀が明智家の先行きを不安視した

朝廷黒幕説

- 「信長が**朝廷を圧迫**あるいは**蔑**（ないがし）ろにしたため、反発した朝廷が光秀を背後から操り、信長を討伐させた」
- 「信長が正親町天皇に無理やり**退位**を迫ったため、誠仁親王、近衛前久、吉田兼見らが光秀に信長を討たせた」
- 信長は安土城内に、天皇の住まいである**清涼殿**を模した御殿を造営して天皇を安土に迎える構想を抱いていた(天守から天皇を見下ろす)。
- 暦を三島暦として、本来は朝廷の掌中にあった「**時の支配**」を信長が掌握し、朝廷の権限の一つを奪取しようとした。
- もしこれら構想が実現すると、公家勢力が「**朝廷の実権が信長に握られ、自分たちの地位がないがしろにされる**」と朝廷関係者が危機感を覚えた可能性は十分考えられる。

「正親町天皇の譲位」と「三職推任」問題

- 信長は、天正6年（1578年）4月9日に右大臣・右近衛大将の官位を辞して以来、無官・散位のみであった。
- 正親町天皇とは誠仁親王への譲位を巡って意見を異にし、天正9年3月に信長は譲位を条件として左大臣の受諾を一旦は了承したが、天皇が譲位を中止したことで、信長の任官の話もそのまま宙に浮いていたからである。
- そこで朝廷は、勧修寺晴豊を下し、天正10年4月25日に信長を太政大臣か関白か征夷大將軍かに推挙するという、いわゆる「三職推任」を打診し、5月4日には誠仁親王の親書を添えた2度目の勅使が訪問した。
- しかし信長は、6日、7日と勅使を饗応したが、この件について返答をしなかった。
- 三職推任の問題はうやむやのまま、本能寺で受難することになった。

明智光秀の単独実行説その壱 四国説

- 四国説の元は、信長の四国政策の急転である。それまで四国の長宗我部氏と織田氏は同盟関係にあり、光秀は取次役を務め、光秀の家臣たちは長宗我部家中と多くの姻戚関係を結んでいた。
- ところが石山本願寺が織田に降ったことで、本願寺の背後を衝く位置にいた四国の長宗我部氏の存在価値が信長にとって薄れ、むしろ織田一門領を四国にも拡大しようとした。
- 無論、長宗我部にすれば信長の裏切りであり、激しく反発。
- 信長は四国討伐に動き、光秀はその板挟みとなり、面目丸つぶれとなった。

斎藤利三、謀反を後押しする

- これに関連して、光秀の家臣・斎藤利三が後押ししたという説もある。
- 利三の母は石谷光政と再婚し、娘を産んだ。
- それが土佐の長宗我部元親の正室だ。
- 従って利三と長宗我部元親は縁戚(利三は元親の室の義兄)ということになる。その縁もあり、光秀や利三は、長宗我部氏とは深く交わっていた。
- 利三はもともと稲葉一鉄に仕えていたが、元亀元年(1570)頃に一鉄と仲違いをしたといい、明智光秀に召し抱えられる。
- その後、天正10年(1582)に、同じく稲葉家中の那波直治が稲葉家を致仕し、やはり光秀に仕えた。

- これに対して稲葉家は、那波を稲葉家に戻すよう、信長に訴える。信長が下した裁決は、**那波は稲葉家に戻し、利三には切腹**させるというものであった。
- その裁決が下ったのは、本能寺の乱の3日前?であったという。さすがに利三の切腹に対しては、周囲のとりなしで撤回されるが、**光秀と利三が不満と不信を抱いた**としてもおかしくない。
- **縁戚の長宗我部を滅ぼそうとし、自分には切腹を命じた信長**に対し、**利三が主君光秀に何かを働きかけた**のではないか。
- ちなみに、本能寺の変後の山科言経の『言経卿記』には、「**日向守内斎藤蔵助 今度謀叛随一也**」とある。

明智光秀の単独実行説その弐

- 「三職推任」で、もし信長が征夷大將軍を受けたら、史上初の「平姓將軍」が誕生することとなる。これは美濃源氏の名門・土岐氏の流れをくむ光秀には到底許せないことだった、という見方もできる。
- さらに、秀吉とのライバル争いに疲れたのではないかとも考えられる。信長家臣団の中で、最初に「一国一城の主」になったのは、坂本城をもらった光秀であり、2番目が秀吉であった。
- 以後も両者は出世競争のデッドヒートを繰り返していた。
- 丹波国での明智光秀の働きはめざましく天下に面目をほどこした。羽柴秀吉の数カ国における働きも比類なし。

「信長の佐久間信盛折檻状」天正8年8月12日

光秀、絶頂期からの転落

- 天正9年2月に、信長は京都で大規模な馬揃え（軍事パレード）を行なうが、この責任者として指名されたのが光秀であった。
- 大軍を差配できる立場に立った光秀は、得意の絶頂だったはずである。
- しかしその後の四国政策の転換や、秀吉の中国攻めへの与力としての援軍命令は、一度は「秀吉に勝った」と思っていた光秀に、深い失望感を味わわせることになった。
- これが謀反の1つの引き金になったとする見方がある。

四国・長宗我部問題とは

- 信長は、天正3年、四万十川の戦いで土佐国を統一した元親に対して、所領を安堵し、長男の弥三郎（後の信親）の烏帽子親として信の一字と、「四国の儀は元親手柄次第に切取候へ」との朱印状を下し、四国の切り取り自由の許可を与えた。
- 信長も当時は阿波・讃岐・河内に勢力を張る三好一党や伊予の河野氏と結ぶ毛利氏と対峙しており、敵の背後を脅かす目的で長宗我部氏の伸長を促したのである。
- その際に取次役となったのが明智光秀であり、明智家重臣の斎藤利三の兄頼辰は、奉公衆石谷光政（空然）の婿養子で、光政のもう1人の娘が元親の正室（信親生母）であるという関係性にあった。

三好康長、信長に下る

- ところが、その直後三好勢は凋落し、信長の脅威ではなくなった。
- 本願寺が再び信長に反抗すると、康長はこれに呼応して高屋城に入った。
- 康長は三好一族の中で最後まで畿内で抵抗を続けたが、天正3年（1575年）に信長に攻められ、4月8日に松井友閑を通じてついに降伏した。
- 同年7月、相国寺にて信長に赦免され、10月に所持していた名物「三日月」を献上信長に大変喜ばれ、一転して家臣として厚遇されるようになる。
- 本願寺との和睦交渉を担当して10月21日に一旦和睦成立に成功させ、河内半国の支配も命じられる。

四国で争う親信長派の二勢力

- 一方、信長からお墨付きを得た元親は、天正4年から本格的に阿波に侵攻。
- 12月には、元親を後ろ盾にして、細川真之に率いられた一宮成祐、伊沢頼俊らが三好長治を攻めて自害に追い込む。
- 天正5年5月には、大西氏を逐い、白地に新城を築いた。
- 「先づはこの大西さへ手に入り候へば阿讃伊予三ヶ国の辻にて何方へ取り出づべくも自由なりと満足し給ひけり」 『元親記』

親信長派の長宗我部氏と三好氏両陣営の抗争

- 天正5年、元親は讃岐国にも侵攻し、香川信景を服属して、その西部をほぼ平定した。
- 翌6年正月十河存保が堺から勝瑞城に入り、長治の跡を継ぎ阿波三好一族の力が復活の気配を見せる。
- その後も阿波は長治の遺臣及び長治の跡を継いだ十河存保と、真之に味方する反三好勢力の戦いは続き、反三好勢力は阿波に侵攻していた長宗我部元親と結びつく。
- こうして、親信長派である長宗我部と三好の両陣営が互いに抗争する事となった。

岩倉城の三好康俊を服属させたことを信長に報告

- 天正7年（1579年）12月
- 岩倉城主の三好康俊は、脇城主の武田信顕と共に長宗我部元親に降り、脇城外で三好氏重臣である三好越後守、矢野国村、川島惟忠らを殺害した。
(脇城外の戦い)
- 天正8年（1578年）6月
- 元親は本願寺降伏を祝し、香宗我部親泰を安土に派遣し、阿波岩倉城の三好康俊を服属させたことを信長に報告した。
- また阿波征服のために、康俊の父三好康長が長宗我部氏に敵対しないように信長から働きかけてくれるよう依頼し、いずれも了解を得た。
- この頃は明智光秀が取次役として、元親・信長の交渉窓口となっていた。

三好康俊の元親服属を認める信長朱印状

- 「三好式部少輔事、此方別心無く候、然而して其面に於て相談せられ候旨、先々相通し候段、異議無く候条珍重候、猶以阿州面の事、別而馳走専一候、猶三好山城守申すべく候」

天正8年6月12日 信長 朱印

香宗我部安芸守殿

- 「三好康俊と阿波一国については、当方に依存は無い」
- 「その点につき相談した旨、先日確認した件、異議ないとのことは誠に大事のことである。なお、阿波方面については今後特別に世話すると、三好山城守（康慶）から伝えられることになっている。」
- 阿波三好氏の一員ながら元親に服属した親泰の処遇を保証するもので、元親の意向を信長が承認する意味合いが強い。

三好康長 朱印状副状

- 爾来不申承候、**仍就阿州表之儀、從信長以朱印被申候**、向後別而御入眼可為快然趣、相心得可申旨候、隨而**同名式部少輔**事、一円若輩二候、殊更近年就忿劇、無力之仕立候条、諸事御指南所希候、弥御肝煎、於我等可為珍重候、恐々謹言、

六月十四日
香曾我部安芸守殿
御宿所

康慶 花押

- **康慶(康長)も、元親の阿波平定を喜んでいる**ことを表明。
- 一族の三好式部少輔**康俊の処遇を元親に依頼**するという形になっている。
- 本貫の地を元親に奪われた康長の内心は複雑だっただろう。

長宗我部氏、信長に媚びる

- 朱印状受領後、天正8(1580)年6月26日、長宗我部元親が明智光秀を通じ挨拶のしるしとして、**鷹16羽と砂糖3000斤を献上**する。
- 信長は、この砂糖を馬廻り衆に分け与える。
- 当時としては貴重な砂糖を献上した元親と、それを惜しげもなく馬廻りに与えた信長。
- 信長に媚びようとする元親と、**元親の気持ちを軽くあしらう信長の心**の変化が感じられる。

元親・利三の危惧 秀吉宛元親書状から

- 長宗我部は、光秀以外に秀吉とも交流を持っていた。
- 天正8年6月19日秀吉から元親に当てた書状がある。
- 秀吉が、播磨に残る反織田勢力を掃討すると共に、因幡鳥取城を包囲している状況を元親に報告している。
- しかもそれを取り次いでいるのが斎藤利三である。
- 「秀吉卿へは、内々に齊藤内蔵助に元親頼み奉る由申されるにより」と土佐軍記に書かれている。
- 長宗我部側では、取次が光秀だけでは不安だったのだろうか。
- この後、秀吉が反長宗我部の行動に至った時、利三もまた長宗我部との関係との間で、苦渋の選択を迫られたと思われる。

本願寺の残党、雑賀衆と共に勝瑞城を攻める

- 天正8年、元親が讃岐の十河城・羽床城を包囲中に、大阪本願寺の残党が三好氏を頼って阿波国へ入ってきた。
- 彼らは紀伊の雑賀衆と淡路の勢力を引き連れて、三好の本拠である阿波国勝瑞城を長宗我部方から取り戻し、続けて一宮城も包囲した。
- 同年11月に元親から羽柴秀吉に宛てた書状では元親が秀吉に以下の旨のことを伝えている。
 - 紀伊の者が朱印状をもらって蜂起しているが、これは信長公のどういう命令か？
 - 上記の理由がわからないので、紀伊の者への攻撃を遠慮した。
 - 阿波と讃岐を攻略した暁には、西方の戦争を手伝わせていただく。
 - 紀伊の者を押さえてくれれば、阿波・讃岐両国の征服はすぐにでも可能だ。
- これをみる限り、元親は信長自身が本願寺の残党勢力を動かしているのではないかと疑念を抱いている。

元親、一条氏を追放し土佐の支配主となる

- 土佐を統一した長宗我部氏は、天正8年6月には砂糖三千斤（約1,800kg）を献じるなど信長に誼を通じる意思を示していた。
- 一方で、阿波・讃岐にまで大きく勢力を伸ばして、康長の子康俊を降誘し、甥十河存保を攻撃して、信長の陪臣が攻められる状態ともなっていた。
- 信長は、元親が力を持ちすぎぬように「一条氏の土佐支配を補佐している元親」と見なしたかった。
- しかし、**天正9**年2月に、元親が娘婿でもあった一条内政を追放すると、**織田政権**と**長宗我部氏**の間に**亀裂**が入り始める。

長宗部氏、毛利氏らと協調関係を結ぶ

- **長宗我部氏**は信長と対立関係にあった**毛利氏**とも**協調関係**にあった。
- 両氏に關係が生じたのは、天正5年7月に毛利氏が大西氏の長宗我部氏への服屬を認めて以降のことである。
- 大西氏や讃岐の親毛利勢力で、**天正7年**（1579年）長宗我部氏の傘下に入った**香川信景**を通じて**協調関係**にあったと考えられる。
- **長宗我部・織田の決裂**に伴い、**天正9年**（1581年）8月までには讃岐天霧城にて**対織田同盟**を結んだ。また東伊予の**金子元宅**とも天正9年（1581年）中には**同盟**を結んだ。
- **信長**は、**毛利氏討伐**を本格化させる中で、長宗我部氏の外交姿勢に対して、次第に**不信感**を抱き始めたのではないだろうか。

信長は四国政策の路線を大きく変更

- 信長は四国政策の路線を大きく変更した。三好氏への肩入れである。
- 三好康長は羽柴秀吉に接近して、その姉の子三好信吉(後の秀次)を養嗣子に貰い受けて連携して居た。
- 康長は本領である阿波美馬・三好の2郡を奪われると、天正9年、信長に旧領回復を訴えて織田家の方針が撤回されるように働きかけた。
- 天正9年(1581)3月には、康長が阿波の岩倉城に入って長宗我部方にあった同族の三好康俊を説得して織田方に寝返らせ、十河存保と共に羽柴秀吉と通じて元親に圧迫を加えた。
- 同年6月、信長から香宗我部親泰に朱印状が与えられた。
- その内容は長宗我部氏に三好氏へ協力することを求めるもので、信長の四国政策が三好氏寄りに変わった事を示すものだった。

織田権力の四国政策の転換

- 対毛利政策の進展と裏腹の関係
- 長宗我部氏の利用から切り捨てへの転換
- 光秀とその家中に大打撃
- 長宗我部氏と戦いになれば、長宗我部氏と親族、姻戚関係で結ばれた光秀とその家中は、敵味方に引き裂かれる
- 光秀には、その面目失墜の屈辱であると共に、織田家中での勢力衰退の可能性大であり、秀吉との競争に敗北することとなる。
- 自分たちを窮地に追い込んだ信長に対して謀反へと飛躍したのか？

秀吉の淡路・阿波進出

- 天正9年9月までに篠原自遁や東讃岐の安富氏も黒田官兵衛を介し、当時中国攻めの任にあった秀吉に人質を差し出して従属した。
- 秀吉も自らの生き残りのため、三好の水軍衆が必要だった事もあり、官兵衛に淡路攻撃を指示した。
- 10月、秀吉は当時淡路志知城に進出していた孝高に、長宗我部氏に抵抗する篠原の木津城、森村春の土佐泊城への兵糧・弾薬の補給を命じている。
- 11月中旬、秀吉は自ら池田元助と共に淡路に渡り、まず由良城の安宅貴康を降した。
- 次いで岩屋城を攻略して生駒親正に守備させ、仙石秀久に淡路の支配を命じた。
- また安富氏の勢力圏であった小豆島も同年中には秀吉の支配下に入った。天正10年4月には塩飽諸島も能島村上氏から離反して秀吉に属した。

信長の四国分令と光秀の苦境

- それまで信長は、明智光秀を仲介として長宗我部氏と友好的な関係を結んでおり、元親の阿波・讃岐の三好勢力への攻撃を容認していた。
- しかし、羽柴水軍の阿波進出を機に、長宗我部氏と織田権力の関係は著しく悪化。
- さらに織田家中で長宗我部氏との仲介役を務めてきた明智光秀の立場も揺らぎ始めることになる。
- 天正10年正月、信長は光秀を介して「長宗我部は土佐1国と南阿波2郡以外は返上せよ」という内容の新たな朱印状を出して従うように命じた。
(南海通記)

織田権力と長宗我部氏ついに決裂する

- その後、御朱印の面御違却ありて、**豫州・讃州上表申し、阿波南部半国、本國に相添へ遣はさるべし**と仰せられたり。
- 元親、**四国の御儀は某が手柄を以て切取り申すことに候**。更に信長卿の御恩たるべき儀にあらず。存じの外なる仰せ、驚き入り申すとて、一円御請申されず。
- 又重ねて**明智殿より齊藤内蔵助の兄石谷兵部少輔をご使者に下されたり、是にも御返事申し切らるるなり。** 『元親記』
(明智光秀から、信長の意向を伝えたが、これをも突っぱねてしまった。)
- そこで**信長**は、火急に**四国征伐の手配**をした。

本能寺の変、長宗我部元親・利三救済説

- なぜ、6月2日に光秀が本能寺に信長を攻めたのか？
- 6月3日に予定していた四国征討が中止になったという結果からみて、「光秀の動機は長宗我部元親と斎藤利三の窮地を救うため」という説がある。
- 利三は斎藤伊豆守利賢の子として天文7年（1538）に生まれ、はじめ美濃の斎藤義龍、次いで、西美濃三人衆のひとり稲葉一鉄の家臣となったが不仲により一鉄の下を離れ、元亀元年（1570）明智光秀に仕えるようになった。
- 光秀の信頼を得た斎藤利三は筆頭家老に任じられ、丹波黒井城の城主となる。
- 徳川幕府三代将軍・家光の乳母である春日の局の父としても知られる。

三好康長、四国攻め先手として阿波に渡る

- 天正10年2月、信長が信州出陣のかたわら、三好康長に阿波渡海を命じる。
- 5月、康長は三千人の軍勢を率いて阿波に渡る。
- 信長卿ご子息三七殿へ四国の御軍代仰せ付けらる。先手として三好笑巖、天正10年5月上旬、阿波勝瑞へ下着す。
- 先づ一の宮・夷山表へ取掛り、両城を攻落す。 「元親記」
- 三好康長は勝瑞城に入り、阿波の親三好勢力を糾合して一宮城・夷山城を攻略する。
- 長宗我部方の野中三郎左衛門・池内肥前守らは一宮城主一宮成祐・夷山城主庄野和泉守を人質に取って牟岐に退却。

信長、四国攻めの朱印状を信孝に下す

今度四国へ至って差し下るに就きての条々、

- 一、讃岐の儀、一円其方に申し付くべき事、
- 一、阿波国の儀、一円三好山城守に申し付くべき事、
- 一、其外両国の儀、信長淡州に至って出馬の刻、申し出べきの事、
- 万事山城に対し、君臣・父母の思いをなし、馳走すべきの事、忠節たるべく候、よくよくその意を成すべく候なり、

天正十年五月七日

三七郎殿

神戸信孝、三好康長の養子となる

- 三七郎殿。阿州三好山城守養子として渡海あり

天正10年6月1日 「宇野」

- 信孝が三好氏の養子となれば、将来讃岐だけでなく阿波も織田一門領となることが約束される。
- これにより、四国東半における織田一門領の成立を迎えようとしていた。
- また、長宗我部の処遇は極めて厳しくなり、信長の意向次第で、長宗我部氏は改易される可能性があり、四国一円も織田一門領となる可能性も出てきた。

信孝、四国出兵 出陣準備

- 信長は四国遠征軍の副将として丹羽長秀、その義弟・蜂屋頼隆、津田信澄を付しただけでなく、『イエズス会日本年鑑』によると信孝に「一夜に大名にお成り候」というほどの人夫・馬・兵糧・黄金など莫大な贈り物を与えたという。
- 5月27日、信孝は兵14,000を従えて、安土に伺候した。
- その後、5月29日には信孝の軍は摂津住吉に着陣する。
- また織田信澄・丹羽長秀勢は摂津大阪、蜂屋頼隆勢は和泉岸和田に集結し、総勢1万4,000の軍が渡海に備えていた。
- 堺には、九鬼嘉隆率いる鉄甲船9隻を含む志摩・鳥羽水軍、紀伊海賊衆の100艘がすでに待機しており、信孝は堺でさらに200艘を調達して出航するつもりだった。

織田信長死す

- 天正10年（1582）6月2日早朝、織田信長は本能寺とともに紅蓮の炎に散った。
- 中世を焼き付くし、「天下布武」を掲げた霸王は、重臣明智光秀の謀叛の前に自刃したのであった。
- その遺体は炎の中に消え去り、一つの時代が終わった。
- それはまた、新しい時代の始まりであった。

本能寺の変の報が信孝軍に届く

- 6月2日早朝、本能寺の変の報が信孝軍に届くと、集められた軍勢のなかには、動揺し、逃亡したものも少なくなかった。
- また光秀の女婿にあたる信澄は信孝・長秀によって野田城（大阪市福島区）で殺害された。
- しかし、秀吉東上の大行軍（中国大返し）の報によって動揺は沈静化し、6月12日、摂津富田（高槻市）に着陣した秀吉軍に合流した。
- このとき、信孝は名目的にはあるが総大将に推された。翌6月13日の山崎の戦いにも光秀討伐軍として参戦する。

本能寺の乱の後、孤立無援の光秀

- 光秀は乱後の京の治安維持に当たった後、京以東の地盤固めを急いだ。
- これは坂本城や織田家の本拠地であった安土城の周辺を押さえ、柴田勝家への備えを最優先したためと考えられる。
- その傍ら、有力組下大名に加勢を呼びかけた。
- しかし、縁戚であった細川藤孝・忠興父子は3日に「喪に服す」として剃髪、中立の構えを見せることでこれを拒んだ。
- また、筒井順慶は、秘密裏に秀吉側に寝返り、大和郡山城で籠城の支度を開始した。
- 更に、高山右近を始めとする摂津衆の多くが秀吉軍に味方する事となった。

光秀の失敗と家康

- 光秀は、**摂津駐屯軍討伐も家康誅殺も果たせなかった。**
- 無二の親友である**細川藤孝**には**計画を相談すべきであった**だろう。
- 藤孝の息子には自分の娘を嫁がせている。まして光秀と藤孝は、足利義昭を將軍職に擁立させるにあたって遮二無二働いた間柄である。
- 細川家は、光秀にとって信頼できる相手であったはずだ。
- 光秀には、**細川家が確実に自分に味方してくれる**という「**光秀の甘え**」があったのだろうか。
- **家康**は三河に帰ると、すぐさま上洛という選択肢を消し、無主状態となった**甲斐・信濃の計略を開始し、甲斐を自領土とする。**(天正壬午の乱)
- 家康は天下取りよりもまず、領土拡大を図った訳だが、秀吉が、あまりにも早く返して来たのは、光秀と同じく予想外であったかも。

齊藤利三首謀説

- 愛宕神社の西坊（別名威徳（いとく）院）での連歌の会での最初の四句
時は今 雨が下しる 五月かな
尾上の朝け 夕ぐれ空
月は秋 秋はもなかの 夜はの月
深く尋ぬる山 ほととぎす
- 雨、空、月、山である。こうして並べてみると、「時は今～」にさほど特別な違和感が無い。
- 雨の音が印象に残った光秀が、発句に「今日は雨が降っている五月である」と詠んだのではないか。
- 光秀が詠んだ句には、実は初めから何も意味など存在していなかったとも言われている。
- 5月28日に伯耆国の国衆である福屋隆兼へ、明智光秀が出したという書状がある。この書状が事実であれば、本能寺の変直前の5月28日時点でも光秀は謀反の決心は出来ていなかったと言える。

- 謀叛を起こすには、今しかない。利三は何度も忠告した。
- しかし、踏み切れぬ光秀は、連句会の前に中国遠征の必勝祈願という名目でくじを引いてみるが、結果は凶であった。
- 何度もくじを引き、三回目でようやく吉が出るが、光秀はやはり謀叛は無理だという結論に達したのではないだろうか。
- その後、5月29日に**光秀は中国地方に物資・武器を送っている**。天下をかけた戦いで必ずその物資が必要になるはずなのに。
- 明智軍はこの後、齊藤利三を中心に動き、そして謀叛に及んだのかも。
- 明智越から京に向かった光秀軍3千人は、利三の軍1万人より何時間も遅れて本能寺に着いたとの説がある。(光秀には信長を殺す意志は無く、翌日家康を殺害する為の京都入りだった?)
- その時には、既に信長は自害していたとも言われている。

本能寺の変後、細川親子は何故離反したか

- 本能寺の変で主君織田信長を討った明智光秀は、娘の玉を嫁がせていた丹後国の大名細川忠興と、その父である細川藤孝（幽斎）に加勢を依頼する。
- 藤孝とは元将軍・足利義昭に共に仕えた長い付き合いがあり、光秀は当然父子が応じてくれるものと思っていたが、意外にも細川父子はこれに応じず、以後光秀の計算と計画はどんどん狂いだした。
- なぜ細川父子は姻戚関係まであった光秀に加勢しなかったのか？
- むしろ光秀が思うほど藤孝が光秀を信頼していなかった(光秀は天下を治める器ではない)ことが、本質的な理由であったのではないだろうか。

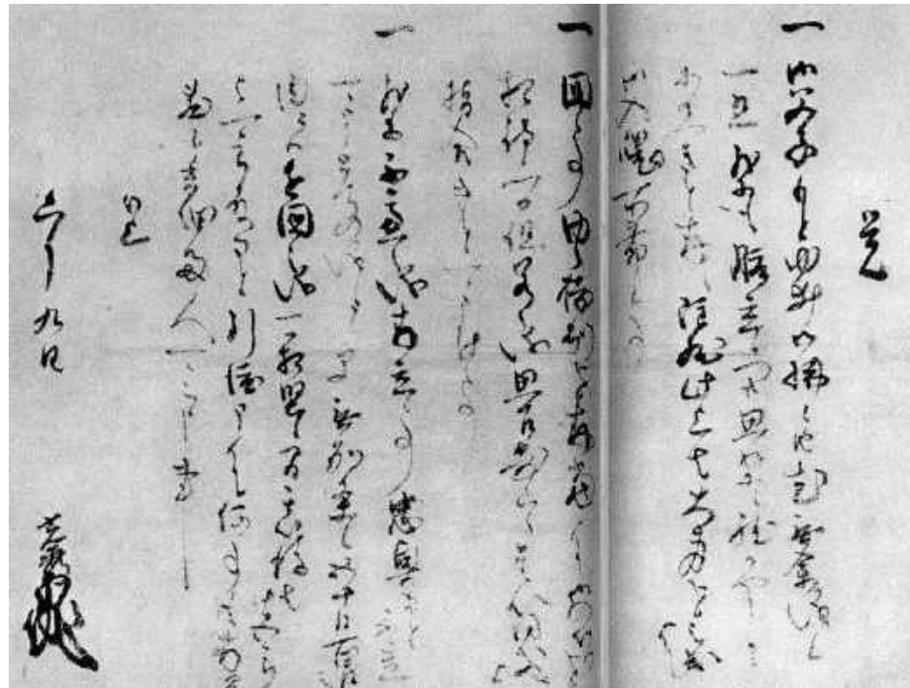
- 信長の死を知った藤孝・忠興（ただおき）父子は、すぐに剃髪して信長への弔意を表した。藤孝は隠居して出家し、忠興は妻の玉を丹後の味土野に蟄居させた。
- 「髻を切ったことに一時は立腹したが、思い直した。御を願う」。「父子が上洛して自分に味方するなら、丹後の他に摂津を、もし希望するならそれに加えて若狭の支配権をも分与する。自分の行為は忠興などを取り立てる目的でなされたもので、近く畿内・近国の情勢が安定したら、自分の子息や忠興の世代に畿内支配権を引き渡す所存である。決して別儀はない」

6月9日「明智光秀の書状」

- 羽柴秀吉は、6月27日の「清州会議」で政治的主導権を握る。そして7月11日、藤孝父子に起請文を送った。秀吉は、藤孝父子が光秀にくみしなかったことをほめ、入魂じっこんを誓った。花押の上に秀吉の血判が見える。ここから時代は秀吉の天下統一へと動いていく。

細川藤孝は織田信長追悼の意向を表明して剃髪・出家。家督を細川忠興に譲り、親子は明智光秀への協力を拒否した。

6月9日、明智光秀は、この状態の細川藤孝、細川忠興親子に向けて、加勢をなおも願う書状を送っている。
明智光秀の書状の記載には哀愁が漂っている。



長宗我部元親とは

- ルーツは大陸から日本に渡ってきた渡来人であり、姓を「秦（はた）」とするのが通説である。
- 秦氏の遠祖は秦の始皇帝と言われ、元親は「長宗我部宮内少輔秦元親」と「秦」を名乗っていた。
- 『元親記』には「秦能俊が土佐の国司となり、土佐に三千貫を拝領する綸旨を受けて盃を賜った」とある。

元親は、織田信長に遅れること5年。
天文八年（1539年）、土佐の地に誕生した。

- 父は、岡豊（おこう）城主で長宗我部家20代目の国親。
母は、美濃の守護代を務めていた斎藤利良の娘。

幕府の奉行衆石谷家から正室を迎え入れる

- 元親は、美濃齊藤氏の縁者である石谷光政の娘を正妻に迎えた。
- 石谷光政は、清和源氏・土岐氏の流れを汲み、また将軍足利義輝の奉行衆でもある。
- 石谷家には、明智光秀の重臣・斎藤利三の実兄で、養子となった頼辰（よりとぎ）がいた。
- 永禄6年（1563年）、長宗我部元親25歳の時に土佐国へ輿入れする。
- なぜ元親は遠い美濃国から妻を迎えたのか。当時、将軍義輝が健在であり、幕府奉公衆の娘との婚姻は足利将軍家との結び付きができるという元親の思惑があったとされる。
- この縁から、元親は光秀や織田信長と関係を持つようになり、長男の信親の烏帽子親を信長に依頼した。

無鳥島の蝙蝠

- 元親は、姻戚関係にあった明智光秀の重臣・斎藤利三を介して、織田信長に嫡男千雄丸（後の信親）の烏帽子親になることと、併せて「阿波への用兵の了解」を求めた。
- 使者に立てられたのは中島可之助（なかじまべくのすけ）という風変わりな名前の家臣であった。
- 中島は信長に謁見し、
「無鳥島の蝙蝠（鳥なき島のコウモリ）」
「蓬萊宮の寛典に候」
という受け答えをしている。
- これがどうかして、我々常人には理解し難い言葉が交わされているのだが、信長は元親の阿波侵攻を許し、更には嫡男千雄丸の烏帽子親も引き受けているのである。

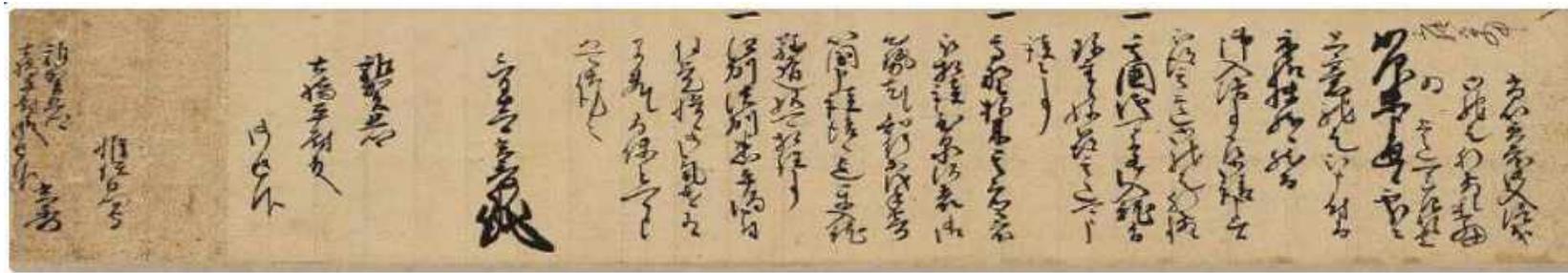
不運の長宗我部元親

- 元親が土佐国を平定したのは、国を継いで15年後の天正3年。
- 南海道（紀伊、淡路、讃岐、伊予、土佐）と西海道（九州全土）を手中に治め、さらに天下をめざす、これが父・国親の遺志を継いだ元親の生きる目標であった。
- そこへ立ちはだかったのが信長。一度は「四国は切り取り勝手」の朱印を与えながら、元親の勢力が拡大すると一転し、阿波南部と土佐は与えるが、阿波北部と伊予は返上せよ、と迫った。元親はこれを拒否。
- 激怒した信長は四国征伐に乗り出すが、出兵前日の天正10年（1582年）6月2日、本能寺の変に斃（たお）れる。あやうく生き延びた元親は、残る讃岐国の切り取りと四国統一を急いだ。

長宗我部とお福(春日局)

- お福の父は、斎藤利三、母は稲葉一鉄の娘である安。
- 本能寺の変の際、利三は家臣に命じて当時4歳のお福を長宗我部に預けた。
- 長宗我部は光秀に合力しようと淡路島まで出かけたが間に合わなかった。
- 秀吉が死んでから元親の妻のお由は、お福を親戚筋の京都三条西家に猶子として出した。
- 摂関家に次ぐ格式の高い公家でそこで礼儀作法などを教わった。
- その後、稲葉正成と結婚し家光の乳母となる。
- 家康に気に入られ、春日局となり大奥の基礎を築いたことは有名。

室町幕府再興説



- 「土橋重治宛 明智光秀書状」の原本が発見された。
- 書状は天正10年6月12日、紀伊雑賀衆の反信長派リーダー、土橋重治に宛てたとされる。
- 書状は「将軍（義昭）のご入洛のことについては、ご奔走されることが大切です」と書かれている。
- 十五代将軍・足利義昭と光秀が通じていたとの内容の密書であり、「光秀らが義昭を奉じて室町幕府を再興させようとする政権構想がうかがえる」としている。

- **義昭**は、天正4年に備後鞆の浦（広島県福山市）に亡命し、それ以降は義昭一毛利輝元政権すなわち「**鞆幕府**」に拠って一貫して上洛戦を試みていた。
- 「**鞆幕府**」は天正7年までは京都の寺院や公家からの訴訟も受け付けていたことが確認される。義昭は、歴代将軍と同様に一貫して**京都五山**をはじめとする**幕府管轄下にある禅宗寺院**に対して頒布した**公帖（任命状）を発給**していた。信長は、すべての公権を独占したわけではなかった。
- 手紙が発見される前から、光秀は、足利義昭を筆頭に毛利輝元や長宗我部元親といった反信長勢力を結集させて、再興することを考えていたとの説があった。
- 手紙が発見されたことで、**本能寺の変の動機が室町幕府の再興説**であるというのが有力となった。

石谷家文書

- 石谷家文書は全部で47通あり、
- (1) 長宗我部家に伝わるもの
- (2) 本能寺の変直前のもの
- (3) 石谷家の由緒や権利関係などに関するもの—に大別される。
- 今回、注目を集めたのが(2)だった。
- このほか、天正6年12月16日、元親から頼辰に宛てた書状があった。長男に信長の一字をもらい、「信親」と名乗らせたと記されている。
- (3) の中では、三好長慶の書状が目立つ。石谷光政の知行を、長慶が保証している点が興味深いという。

石谷光政・石谷頼辰（よりとき）

- 石谷家は美濃国石谷郷を本貫とする一族で、鎌倉時代、清和源氏の土岐光行が悪党退治の功績でこの地に入った。
- 室町時代には、将軍側近の奉公衆を務めた。
- 永禄6年には蜷川親長の仲介で、次女を土佐国の戦国大名・長宗我部元親に嫁がせた。
- 光政は13代足利義輝に仕えたが、永禄8年、義輝が松永久秀らに暗殺されたことから、娘の嫁ぎ先である長宗我部家を頼って土佐に渡った。
- 後継者がいなかったため、光秀の重臣・斎藤利三の兄にあたる頼辰（よりとき）を養子に迎えた。
- 元親と利三、頼辰は義理の兄弟になり、頼辰は明智と長宗我部を結ぶ実務者として、坂本城と元親の居城・岡豊城を行き来したと考えられる。

①中島重房・忠秀書状（天正6年11月24日）



- 長宗我部元親の家臣の中島重房らが、石谷頼辰・斎藤利三に宛てて出したもの。
- 天正6年に織田信長から元親へ出された「四国を平定してもよい」という朱印状に対する感謝の意を述べている。
- 信長の朱印状の存在が確認されるとともに、元親家臣らに元親と信長の関係が好ましいものと認識されており、元親による四国平定の戦いが信長の了解を得て行われていたことの証拠となる史料である。

②斎藤利三書状（天正10年1月11日）

斎藤利三が実兄石谷頼辰の義父、空然（石谷光政）に出した書状。



織田信長は長宗我部元親に、天正9年の後半頃に、土佐と阿波半国しか領有を認めないと通達した。元親は承知せず、それを諫めるために利三が、石谷頼辰を使者として派遣した。 『長宗我部元親記』 『南海通記』

本書状は、頼辰を派遣する旨を伝えると同時に、空然に元親の軽挙を抑えるように依頼したもので、信長と元親との対立状況がわかるとともに、利三が元親に働きかけを行った確証である。

③長宗我部元親書状（天正10年5月21日）

長宗我部元親が斎藤利三に宛てた書状。



- 1月の時点では拒絶した元親だが、この書状では信長の命令（朱印状）に従うとしている。
- 阿波国の一宮、夷山城、畑山城などから撤退しているが、海部・大西城は土佐国の門にあたる場所だからこのまま所持したいこと、「甲州征伐から信長が帰陣したら指示に従いたい」と、斎藤利三に伝えている。また「何事も頼辰へ相談するように」とも述べている。

斎藤利三の苦悩と決断

- 長宗我部元親が斎藤利三に宛てた天正10年5月21日付書状には、元親が信長の命令に譲歩する意思が書かれている。
- しかし、信長は既に2月時点で長宗我部征伐の発動を行い、5月7日には三男信孝に四国国分けの朱印状を与えているので、時すでに遅しと言える。
- そのためこの書状は斎藤利三には渡されなかったか、あるいは受け取りを拒否されたのではないだろうか。
- 元親が譲歩したといっても、織田信長は阿波を取り上げる方針を決めており、信長にはとても報告できない内容だった。
- **利三は、こうなったら「信長の四国攻めに加担するか、あるいは思い切って謀反に立ち上がるか。」の決断に迫られたと思う。**

④近衛前久書状（天正11年2月20日）



②近衛前久書状 天正11年(1583)2月20日

- 元関白の近衛前久が石谷頼辰・光政に宛てた書状。
- 「去年不慮、於京都信長生害之刻」とあり、天正10年6月2日の本能寺の変で織田信長が自害したことを指しているため、翌11年のもの。
- 本書状からは、前久が信長と長宗我部元親との間を取り持っていたことがうかがえ、また前久が「元親律儀人にて」と評していたことがわかる。

⑤小早川隆景書状（天正11年5月22日）



▲ ⑤小早川隆景書状 天正11年(1583)5月22日

- 毛利輝元の重臣の小早川隆景が石谷頼辰に宛てた書状。
- 本書状は、本能寺の変の後、天正11年4月に羽柴秀吉が柴田勝家を破った賤ヶ岳の戦い（現滋賀県）の直後に出されたもので、毛利氏の本拠地だった吉田（現安芸高田市）に長宗我部氏の使者が訪れ、それを受け入れた輝元も長宗我部氏との安定した関係を望んでいたことがわかる。
- この後、毛利氏は秀吉に接近し始め、元親は反秀吉陣営を貫いた。この時期の毛利氏と長宗我部氏が、お互いの出方をみるための駆け引きをしていたことがわかる。

本能寺の乱の原因についての私考

- 何故、本能寺の変が起こったのか？
- その要因は一つではない。
 1. 西国支配における織田家臣団(明智と秀吉)の派閥抗争と敗北感。
 2. 織田一族による中央集権化と、西国転封に対する危機感
 3. 伝統的な室町幕府再興を目指す光秀と、自ら国主となり朝廷をも牛耳ろうとした信長への危惧

信長の野望は、足利幕府を解体した上で、自身は太政大臣となり、家康を征夷大將軍に任じて、源平合体の新体制を創出しようとするものであった。
 4. 長宗我部の滅亡を防ごうとする利三の切羽詰まった思い。

これらの要素が複雑・階層的に絡みあい、光秀を謀反へと追い込んでいった。

**家康を逃がした段階で、光秀の思い描く夢は崩壊。
謀反は失敗。**

たとえ、山崎の戦いで勝利したとしても、家康に勝つ事は不可能であった。

何故家康を取り逃がしたのか（もしかしたら？）

- 光秀は、室町幕府再興のため、および信長の野心を防ぐため、**細川藤孝と手を組んで織田信長、信忠**そして**徳川家康の暗殺**を企んだ。
- 6月2日に家康は本能寺に戻る予定であり、光秀、藤孝は6月3日を謀反決行日と決め、京で信長、信忠と共に家康を討とうと予定していた。
- しかし、**利三が謀反を急いだ**。長宗我部を助けるために信孝が出港する前に信長を殺す必要があった。そして、**信長さえ殺せば目的は達成した**。
- 斎藤内蔵助は「四国の儀を気遣に存ずるによって也、明智殿謀叛の事いよいよ差し急がるる」「日向守内斎藤蔵助、今度謀反随一也」
- 家康を逃したことで、乱の失敗を予感した藤孝は直ぐに息子に家禄を譲り剃髪したのかも？
- また、家康を逃がしたのは**藤孝の裏切り**であるという説もある。

本能寺の変の後の元親

- 変の2ヶ月後の8月。元親は勝端城を攻め落とし、阿波を手中におさめた。
- さらに讃岐へも進軍し、総勢3万6000の軍で十河城を陥落させた。
- 同じ頃、信長の後継者をめぐり、織田家臣団での勢力争いが行われていた。
- 清須会議で後継者を狙う豊臣秀吉と、それに反目する柴田勝家。元親は勝家側につき秀吉と対抗するも、賤ヶ岳の戦いで勝家は敗死。
- 元親は家康とも通じ、秀吉の背後を突いて挟撃する密約を結んだ。
- しかし讃岐攻略に手間どり、軍勢2万の派兵準備が整ったのは秀吉が家康と和睦した後のことだった。
- その後も元親は侵攻の手を休めず、伊予の平定に成功し、天正12年末には河野氏を降伏させ、天正13年春までには西予の勢力もほぼ平定した。

ついに長宗我部氏、滅亡する

- 元親が四国統一を進めていた頃、毛利と豊臣の領土問題も一段落つき、長宗我部元親だけが敵対した存在であった。
- 秀吉は天正13年6月、弟・羽柴秀長を総大将とする10万の軍勢を用意する。そして淡路、備前、安芸の三方面から四国に向かわせた。
- これに対する元親軍は総勢4万。数だけでなく、一領具足で兵農分離が完全ではない長宗我部は秀吉軍の敵ではなかった。
- 阿波戦線が破綻すると、元親は秀吉に降伏。安堵されたのは土佐一国のみだった。
- その後、元親の跡を継いだ盛親が関ヶ原合戦で遁走、土佐は家康に没収された。盛親は1615年大坂夏の陣で、捕縛され斬首。ここに長宗我部氏が滅亡する。

参考資料

- 多聞院日記
- 昔阿波物語
- 三好記
- 細川記
- 元親記
- 明智軍記
- 多聞院日記 三
- 惟任退治記 大村由己著
- 信長公記
- 正親町天皇紀 編年資料 天正十年
- フロイス日本史 ルイス・フロイス著
- 石谷家文書 将軍側近のみた戦国乱世
- 戦国の活力 8 山田邦明
- 織田・徳川同盟と王権
- 織田政権の成立と崩壊
- 本能寺の変431年目の真実
- 夏草の賦
- 誰が信長を殺したのか
- 明智光秀と本能寺の変
- 明智光秀一謀叛にあらざ
- 信長殺し、光秀ではない
- 謎とき本能寺の変
- 信長燃ゆ
- 検証本能寺の変
- 謎解き本能寺の変
- 決戦本能寺
- 小林正信著
- 小林正信著
- 明智憲三郎著
- 司馬遼太郎著
- 桐野作人著
- 小和田哲男著
- 大栗丹後著
- 八切止夫著
- 藤田 達生
- 安部龍太郎
- 谷口克広著
- 藤田達生著
- 葉室麟他著